

(製紙産業技術遺産保存・発信 資料No.11 の修正版)

日本製紙産業の発展を可能にした輸入チップ

時代背景

1960年：紙の需要は伸び続けていた。しかし、原木が不足し、原木価格が上昇し、採算性を圧迫した。

発想の転換： それでは、北米西岸の木材チップ工場からチップを運んでこよう。

船で北米から運んで如何にコストメリット出すか？ チップの購入・集積、港での船積み、船の形、港での荷降ろし等の技術的な課題を如何に解決するか？

これらについては、取り組まれた花谷守正氏(当時東洋パルプ株)がその技術開発の詳細を紙パルプ技術タイムスに連載されている。

1964年に、東洋パルプの呉丸が呉港に入港し、ついで、大昭和製紙の大昭和丸が清水港に入港、輸入チップの時代が始まる。

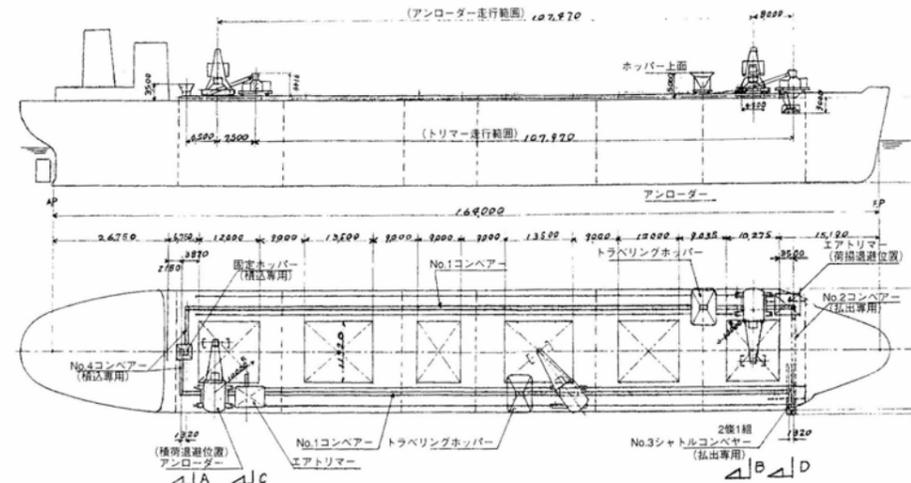
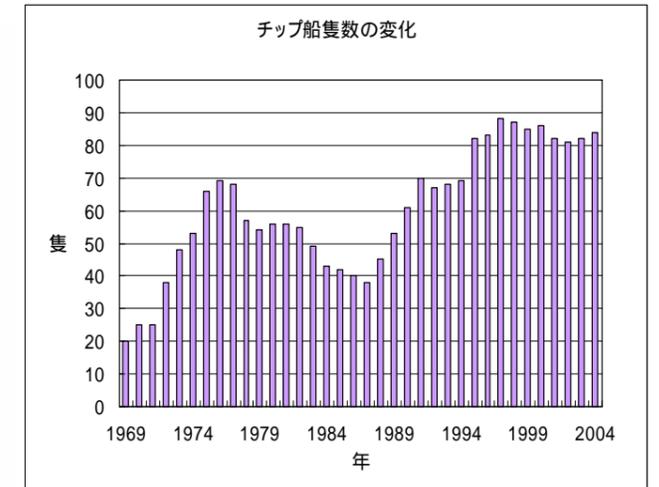


図1 呉丸の側面図と平面図



日本の製紙産業に与えた影響

日本の製紙産業が輸入チップを原料として利用できたことが、その後の製紙産業の形態を以下のように大きく変えた。

工場立地の変化 原木のあるところ → 港の近く(臨海立地)

工場形態の変化 大型で、原木から紙までの一貫工場

例：王子製紙苫小牧工場、三菱製紙八戸工場、北越製紙新潟工場、日本製紙石巻工場、大王製紙三島工場

この独自の生産形態が国際競争力を生み、自国原料に乏しく、エネルギーコストの高い日本で製紙産業が発展できた。船隻数の増加(2004年現在84隻)、木材原料に占める輸入チップ比率の増加(2004年 広葉樹チップ89%、針葉樹チップ43%)がその重要さを物語っている。

さらなる発展

この延長上に、海外植林によるチップの安定供給の考えが生まれ、日本の各製紙会社は海外植林を進めている。

2004年末植林面積 356.4 千ha (植林目標面積 455.4 千ha)

現在も、古紙とともに製紙産業の基礎原料となっている。

